

戦後、サンフランシスコ講和条約を結ぶ頃、米国の識者の中に、日本のことをよく知らずに「東洋の田舎者と急いで講和条約を結ぶ必要はない」という意見が起こり、これを憂慮した日本政府は、対策として日本の国宝や古美術の巡回展を米国の主要都市で開催した。結果は期待通りで、これを見た多くの識者は出展された美術品の美しさに感嘆し、このような芸術品を作れる日本人の能力と、何百年もこれらの作品を大切に維持管理してきた日本人の美術品に対する意識の高さに気付き、日本民族の文化の高さを理解した。そして、こういう国となら、早く講和を結んで世界でもっと活躍してもらうほうが良いという方向に動きが変わったという。この話は、数年前に大原美術館の大原謙一郎理事長（当時）に教えていただいたのだが、日本の優れた美術品を外国人に見てもらえば、日本人および日本民族の芸術や文化の高さを理解させ

## 絵が好きな子どもを 育てる教育の実現を



ることができると考えた、当時の日本の関係者の教養の豊かさと、優れた美術品を見て日本人が思っていた通りに感じる事ができる豊かな教養を備えた米国人がいたことに、大変感銘を受けた。戦前の日本の高等教育を受けた方々は、旧制高等学校時代にいわゆるリベラル・アーツを学び、豊かな教養を身に付けたのだと思う。

日本は、仏教伝来以来、寺社建築、仏像、絵画をはじめ、多くの優れた美術品や工芸品などを目にし、自分たちも同じような物を作ろうと必死に努力を重ね、日本独自の伝統工芸といえるレベルにまで高めて発展させてきた。これは、一部の人間だけでなく、日本人全体の美に対する意識の高さがあったからだと思う。美しい物や良い物を誰もが大切に扱い大事にしてきたため、テレビの鑑定番組などで、普通の家庭からでも高価な焼き物が時々出てきたりしていることを考えれば

分かると思う。日本で立派な芸術品が作られているのは、日本人全体でこうした伝統を育んできたからである。日本の工業製品が世界で尊ばれるのは、日本人は少しでも良い物や美しい物を作ろうとどここの工場でも心を込めてモノづくりに取り組んでいるからだ。日本の中小企業やいわゆる町工場には、そこでしか作れない、世界に誇れるものを作っている匠がいる所がたくさんあるのも同じ理由からだ。

武蔵野美術大学は前身の帝国美術学校の建学から今年で88年になるが、建学の理念に基づく教育方針を貫き、多くの卒業生を社会に送り出してきた。美術芸術分野のみならず、大手メーカーのデザイン部門、広告宣伝会社などで多くの卒業生がリーダー的な活躍をしており、美大としての社会的責任を果たしてきたと自負している。しかし、近頃の美術系大学志望者が少子化による18歳人口の減少率以上の割合で減少傾向にある状況を考え

## 天坊 昭彦 ● 学校法人武蔵野美術大学理事長

ると、大学経営の将来に対して不安を感じる。入口に来る美大志望者が減ると、やはり競争が少なくなり、どうしても学生の質が下がってしまう。良い学生を取るために定員を減らすと学費収入が減り、学校経営に問題が生じる。悩ましい問題ではあるが、世界に誇れる美術家の水準を保ち、伝統芸術を支え、日本人の美に対する高い意識を維持し、将来にわたって日本のモノづくりの底力を発揮し続けるためには、美大志望者数がいま以上に大きく減少しないよう、初等中等教育における美術教育の時間を増やし、美術の楽しさを知り、絵を描くことが好きな子どもを育て、潜在的な美大志望者の絶対数を増やしていく政策を早急に実現することが必要だ。繰り返しになるが、日本が世界に誇るモノづくりを支えているのは、国民の美術に対する意識の高さだ。これを支える美大を救うのは、絵が好き な子どもたちである。